

## 写真で見る昭和の横浜⑦ 震災から命を助けた池

この写真は、二〇一二（平成二四）年に寄贈していただいた「海老塚明資料」に含まれていた一枚である（資料番号一六九、山田英邦氏寄贈、本誌第一五号「寄贈資料」参照）。

海老塚家は、西戸部町（現西区）の地主・旧家で、明は慶応二年生まれ、市会議員や諸会社の役員なども勤めている。寄贈資料は、土地や貸家関係資料が主なものであり、また、海老塚明が、関東大震災後の区画整理事業では、第一地区委員を務めたので、関係の図面類なども残されている。

この写真については、納められていた封筒に「大正拾弐年九月一日ノ大震火災後住宅地焼跡ニ於テ避難者一同撮影セシ」と書かれており、台紙裏には、一九二四（大正一三）年六月二六日に撮影されたことが記されている。このことから、一九二三（大正一二）年九月一日の関東大震災において、避難した人々と、焼失した海老塚家の住宅跡地において、翌二四（大正一三）年に撮影した写真であることが分かる。

また、写真には「紀念 助命池 有志建之」という木札と、枝に隠れて見えない字もあるが「大正癸亥」、「幾多人命」や「紀念松」と彫られた石碑が見え、何らかの記念として石碑や木札が立てられ、この記念として撮影された写真であることが分かる。



石碑部分



「助命池」にて記念撮影 1924年6月（海老塚明資料）

この中で、海老塚家があつた「字御所山下附近及山上」では、「此附近に於て奇しくも命を取止めた者は、坂下の海老塚

所から再度の避難が必要となるなど、大きな被害となつた。特に、この地域には御所山などの丘陵地があり、そこを登る通路が限られていたため、俗に「鶴越」と呼ばれていた急坂などで、被害が拡大している（『横浜震災誌』第二冊）。

※「写真で見る昭和の横浜」シリーズであるが、今回は大正時代の写真を掲載した。  
〔参考文献〕  
『横浜震災誌』第二冊（横浜市役所市史編纂係、一九二六年）、今井清一『横浜の関東大震災』（有隣堂、一九〇〇七年）。

（百瀬敏夫）

周知のように、関東大震災は、横浜市域においても未嘗有の災害であった。海老塚家があつた西戸部町も例外では無く、市内の他地域と同様に火災が多数発生し、また、丘陵地が火除けにならなかつたところもあり、避難した場所から再度の避難が必要となるなど、大きな被害となつた。特に、この地域には御所山などの丘陵地があり、そこを登る通路が限られていたため、俗に「鶴越」と呼ばれていた急坂など、被害が拡大している（『横浜震災誌』第二冊）。このようにして助かつた人達が、「震火の一夜を／池中に生きた／数十名の人の報恩／海老塚明氏邸内に感謝の記念碑」と見出しにあるように、松の木を七本植えて、記念碑を建設した（同紙）。この植樹と建碑を記念して、この写真は撮影されたものであつた。

丘陵地の崖を背にして、石碑の左横（向かって右）には、海老塚明（髭の人物）があり、その隣が、妻で平沼亮三の姉いな子であろう。写真には、五〇人ほどが写つており、海老塚家や隣近所の辛くも難を逃れた人達であつた。

翌二四年、碑の建設を報じた記事では、「猛火同邸（海老塚邸）を襲ひ邸内の樹木から堂々たる家屋も見る（内に灰燼と帰したが、「五十余名」）同邸内なる約十坪許りの池中に身を投じて火の粉降る終夜同水中に身を浸して」という逼迫した状況を伝えている（『横浜貿易新報』二四年六月一〇日）。

このようにして助かつた人達が、「震火の一夜を／池中に生きた／数十名の人の報恩／海老塚明氏邸内に感謝の記念碑」と見出しにあるように、松の木を七本植えて、記念碑を建設した（同紙）。この植樹と建碑を記念して、この写真は撮影されたものであつた。

丘陵地の崖を背にして、石碑の左横（向かって右）には、海老塚明（髭の人物）があり、その隣が、妻で平沼亮三の姉いな子であろう。写真には、五〇人ほどが写つており、海老塚家や隣近所の辛くも難を逃れた人達であつた。

約三十名があつた（同五六頁）と記述されている。つまり、手前に写つてゐる「小池」が、数十名の命を救つた、まさに「助命池」であつたことが分かる。

翌二四年、碑の建設を報じた記事では、「猛火同邸（海老塚邸）を襲ひ邸内の樹木から堂々たる家屋も見る（内に灰燼と帰したが、「五十余名」）同邸内なる約十坪許りの池中に身を投じて火の粉降る終夜同水中に身を浸して」という逼迫した状況を伝えている（『横浜貿易新報』二四年六月一〇日）。

このようにして助かつた人達が、「震火の一夜を／池中に生きた／数十名の人の報恩／海老塚明氏邸内に感謝の記念碑」と見出しにあるように、松の木を七本植えて、記念碑を建設した（同紙）。この植樹と建碑を記念して、この写真は撮影されたものであつた。

丘陵地の崖を背にして、石碑の左横（向かって右）には、海老塚明（髭の人物）があり、その隣が、妻で平沼亮三の姉いな子であろう。写真には、五〇人ほどが写つており、海老塚家や隣近所の辛くも難を逃れた人達であつた。

翌二四年、碑の建設を報じた記事では、「猛火同邸（海老塚邸）を襲ひ邸内の樹木から堂々たる家屋も見る（内に灰燼と帰したが、「五十余名」）同邸内なる約十坪許りの池中に身を投じて火の粉降る終夜同水中に身を浸して」という逼迫した状況を伝えている（『横浜貿易新報』二四年六月一〇日）。